

白血病を乗り越えた少女、 ハウラがイラクから初来日！

2015 年 7 月 31 日 (金) から 8 月 12 日 (水) まで、イラク・サマワ出身で JIM-NET の支援によって白血病を克服したハウラ・ジャマルさん、JIM-NET イラク現地職員で院内学級の教師をしているイブラヒム・ムハンマドさん、イブラヒムさんの娘ファートマさんが来日、東京・北海道・長崎を訪問しました。

佐藤真紀 JIM-NET 事務局長の報告と、訪問各地からのレポートをお届けします。



被爆 70 周年の長崎で、原爆資料館を訪れたハウラさん (左) とイブラヒムさん (右)。二人の背後にあるのは 1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分、長崎に投下された原子爆弾「ファットマン」の原寸大模型。開館した 1996 年当時は緑色だったが、近年の研究で黄色だったことがわかり、塗り替えられて今年 7 月 28 日に改めて公開された。(2015 年 8 月 8 日撮影)

【ハウラが日本にやってくる】

戦後 70 年、戦争体験が風化する日本。

しかし、世界では戦争だらけだ。子どもの頃から戦争を見続けているイラクの子どもたちが大人になっていく。

そして、今回は、ハウラちゃんが日本に来てくれることになった。ハウラちゃんは、10 年前からチョコ募金に 6 回も絵を提供してくれている白血病を克服した女の子。2009 年に亡くなったサブリーンとともに、JIM-NET 専属のアーティストだと僕は思っている。

アーティストが日本にやってくる。大騒ぎしてほしい。ハウラが有名人になったら、イラクでがんと闘う子どもたちを勇気づけることができる！

しかし、その前に、保護者としてやってくるイブラヒム先生を紹介しなくては。院内学級の先生であり、JIM-NET のバスラ事業を仕切っている。そして今回娘のファートマも同伴するという。この 3 人のストーリーからイラク戦争を浮き彫りにし、日本が支持した過ちを問いたい。

【イブラヒムとイラク戦争】

イブラヒムは高校の数学の教師だったが、1991 年には湾岸戦争が起こり、その後の経済制裁下で食いつなぐのは大変だった。経済制裁が理由で、栄養失調や医薬品不足で 100 万人が死亡したといわれ、その半数は 5 歳以下の子どもだった。米軍が使用した劣化ウラン弾の放射能の影響でがんの子どもや先天異常の子が増えた。一方、サダム・フセインの独裁は続いた。ちょうどそのころ、がん患者のサブリーン(1995-2009 年)が生まれている。父親は貧しく、兵役に付かず日雇いの仕事をしていたので捕まえられ、獄中で耳をそぎ落とされた。(サダムに逆らうと見せしめとして耳をそがれた)そこから感染して死んでしまったのだ。父を失うことでサブリーン一家はさらに貧困にあえぐことになった。

イブラヒムはイラクを離れ、イエメンに出稼ぎに行き、ファートマが生まれる。イラク戦争直後に家族がバスラに戻ると妻マリyamが妊娠していることがわかったが、同時に白血病に侵されていた。イラクの医療は戦争で破壊され、どうしようもなくヨルダンに向かった。幸いなことに映画俳優のポール・ニューマンが基金を作り、妻の治療費を出してくれた。フリージャーナリストの後藤健二さんも、このころイブラヒム家族を支援してくれた。妻が亡くなると途方に暮れているイブラヒムに寄り添い、遺体をイラクに送るのを手伝ってくれたという。2015 年、後藤さんが「イスラム国」に囚われたことを知ると、解放に向け、そういったエピソードをメディアに伝えてくれた。「日本で会えることを楽しみにしていたのに」後藤さんの訃報を聞きイブラヒムは泣きながら、「彼らをイスラム教徒だと思わないでほしい」と訴えた。

NEWS

白血病を乗り越えた少女、ハウラがイラクから初来日！

……佐藤真紀 (JIM-NET 事務局長) P1

各地でお世話になった皆さんから P4

シリアの将来のために一助け合う社会へ

……福田直美 (ヨルダン事務所長) P6

JIM-NET は NGO 非戦ネットの仲間たちと安保法案の廃案を求めています……内海旬子 (アドボカシー担当) P7

シリーズ「戦後 70 年企画」…崔麻里 (イベント担当) P7

鎌田代表のつぶやき／「ハウラの赤い花」グッズ P8

2005 年、イブラヒムとファートマは、妻が亡くなるとホテルを追い出された。私は、イブラヒム親子を JIM-NET の事務所に連れてきて、井下理事や西村陽子さん（アラブの子どもと仲良くする会）らに面倒を見てもらうことにした。

「ファートマは当時 4 歳で、母親の死を理解できていなかった。彼女は明るく天真爛漫さを存分に発揮し、妻を失い陰鬱にブラブラしているだけのイブラヒムとは対照的であった。彼女の明るさがイブラヒムを救ったのだろう。」（井下）

イブラヒムも 2005 年の終わりには元気を取り戻したが、イラクの治安は最悪になっており、多くのイラク人が難民として国外に避難し始めていたが、「バスラのがんの子どもたちのために JIM-NET で働きたい」と言ってイラクに戻っていったのだった。いつもファートマは、父に連れられて病院でがんの子どもたちと遊んでいた。サブリーンや、ハウラと一緒に絵を描いて育った。そんな彼女の夢は、「お父さんのように、がんの子どもたちに勉強を教えたい。JIM-NET で働きたい」と目を輝かせる。

ファートマはどうしているか気になっていた。2005 年にイブラヒムに連れられバスラに帰った後、ほどなく再婚したイブラヒムの後妻さんとうまくやっているだろうか？不安定なイラク国内で勉強はできているのだろうか？健康を害していないだろうか？気になっていた。今回、長崎で再会した。アンマンからは 10 年ぶり。でっかくなっていた。私の膝に上ってきて、軽やかに走り回っていた頃の姿を思い出していた私は少々戸惑った。これが時の流れだ。私の頭の中では嫌な思い出が消えていった分、アンマンで彼らと過ごした時間の美しさはますます際立っているのだが、ファートマの頭の中でその思い出など埋没し消え去る寸前であろう。

それでいい。日本でいろんなものを見て、どんどん新しい知識を若い頭に入れていってくればよい。それが成長だ。以前と変わらないファートマの眼をみてそう思った。

井下 俊（医師・JIM-NET 理事）

【安保法制に反対する】

8 月 1 日、来日した翌日イブラヒムは、築地本願寺で行われた NGO 非戦ネットの集会でマイクを取った。

「日本に来て、驚いたのは、安保法案が国会を通過しそうだということです。戦争の結果は決して平和ではありません。平和の結果は平和です。私の国は、戦争ばかりしている。結果、現在ではたくさんの病気が蔓延し、薬もなく、多くの人が苦しんでいます。イラクを攻撃したアメリカ軍を、イラクの人たちの中には恨んでいる人たちもいます。私は、現在、日本の NGO で働いています。イラクの人たちは、それについて、非常に好意的に思っているし、自分達を助けてくれる日本に好意を持っているでしょう。しかし、日本がアメリカを支持し、支援するようなことがあれば、きっと私の立場も危うくなるでしょう。」そして日本語で「（私は言いたい）イラク・センソウ・ナンダツタノ？」とつけ加えた。

【サマーワのハウラ】

ハウラは、サマーワの市内から少し離れたルメイサというところで生まれた。8 人兄弟。父親は仕事がなく、ナツメヤシを売っ



闘病中のハウラさん（2005 年）当時 9 歳。今回は 19 歳で来日。

て生計を立てている。

2005 年、白血病だと分かりバスラの病院までやってきた。

そのころのイラクは、内戦状態。非戦闘地域だといって派遣された陸上自衛隊も、ほとんど宿営地の外には出られないほどに治安は悪化し、迫撃砲も 13 回撃ち込まれている。反米武装勢力が日本も敵だとみなした攻撃が多数だが、中には、地主が自衛隊に賃貸契約更新で賃貸料の大幅値上げを求め、交渉が難航したあげく、迫撃砲がうちこまれるというケースもあった。そのような時期に、サマーワからバスラまで 300km 近い距離を移動してハウラは病院に通い続けたのだ。

イブラヒムが見せてくれる子どもたちが描いた絵の中にハウラの赤い花の絵があった。たくさんの人がハウラの花に導かれるように JIM-NET にやってきた。

今治タオルのコラボレーションや、クナクーラという化粧品のパッケージになった。『ハウラの赤い花』という絵本ができたし、カタログハウスは、ギフト用のメッセージカードを開発した。また、磯村一路監督は、北川景子主演の映画『瞬き』のワンシーンにハウラの絵を使いたいと言ってきた。

ハウラは、あまりそういったことも知らずにひたすら絵を描き続けた。治安が悪化すると病院に来るだけでも大変である。チェックポイントをなかなか通過できずに時間がかかってしまう。夜の移動は危険なので、しばしば、母親と 2 人でイブラヒムの家に泊めてもらっていた。ハウラは、絵を描くことで病氣とそして戦争という不条理と闘っていたのだ。

2009 年 5 月、私はイラク政府の招待でバスラで開催された癌学会に出席した。その際病院を訪問しハウラとサブリーンに会うことができた。翌日、会場では、ハウラと何人かのがんの生存者たちがステージに上がり歌を歌ってくれた。おちゃめなファートマも着飾ったドレスと一緒に歌っていた。

「希望のかげら」という歌だ。

「この場所から、私たちは言います。皆様、ありがとう。

今日、私たちの希望が戻ってきました。

そして、求めていたものが、実現したのです。

愛と薬で

治ったのです。

忍耐と信念で

私たちは、勝利者として、がんをうちまかしました。」



幼いファートマさん（右）の髪を結ってあげるサブリーンさん（左）。（2008 年）

残念ながら、サブリーンはステージには上がらなかった。数か月後に亡くなった。そしてハウラは生きている。いや、サブリーンも私の心の中で生き続けている。

今回 3 回の講演では、サブリーンの話もすることにしたのだ。ビデオ映像には、サブリーンとハウラが仲良く絵を描いているところも写っており、ハウラにとっては見るのがつらかっただろう。途中で泣き出してしまった。

2009 年というのは、思い出してもすごい年だったと思う。サブリーンという少女を、みんなで応援した。イブラヒムが病床の彼女を毎日見舞い、毎日メールで様子を知らせてくれた。最後の最後まで。サブリーンは JIM-NET の原点である。

ハウラは、サブリーンだけでなく多くの患者が死んでいくのを見ている。自分が助かったことは喜びであるが、実は、どこかに後ろめたさを感じている。

「大丈夫、ハウラの絵は、サブリーンのように、子どもたちの薬代を作り、命を救ってきたんだ」

でもハウラは、物足りないようだ。

「日本の皆さんの支援がなかったら、私はここにはいません。心から感謝している。多くの患者治療が治療を受けたくても、薬が足りないなどの理由で命を落としている。だから、私は、将来、イラクで医者になって、私がそうであったように、ガンと闘う子ども達を助けてあげたいんです」と訴えた。

【北海道で描いた いのちの花】

ハウラが好きな花を聞いた。「バラは、情熱的でうっとりする香りがいいの」。今回何枚か持ってきてくれたバラの花の絵に混ざって、「イスラム国」に処刑されたイラク兵士の絵と逆にイラク軍がイスラム国の兵士を殺している絵があった。

サマーワは「イスラム国」との戦闘地域ではないが、多くの兵士が前線に送られている。実は、ハウラの父親も最近徴兵されたという。「イスラム国」との戦闘の前線に行くと 2 週間は戻ってこない時もある。「心配でたまらない。早く、イスラム国をやっつけて追い出してほしい。」とハウラは願って絵を描いている。

ハウラ取材した記者は、後日記事をまとめるのに「サマーワは、非戦闘地区ですよね。そんなところで銃声がするのでしょうか?」と質問してきた。ハウラに確認すると、「サマーワでもテロがあります。市場で爆発があり、ばらばらになった遺体が転が

っているのを見ました。銃声は毎日というわけではないですが聞こえてきます。誰が撃っているのかはわかりませんが。」ハウラがまず日本について思ったのは、湿気を運び、緑にあふれた自然だ。乾燥して砂塵が舞うイラクとは大違いだ。

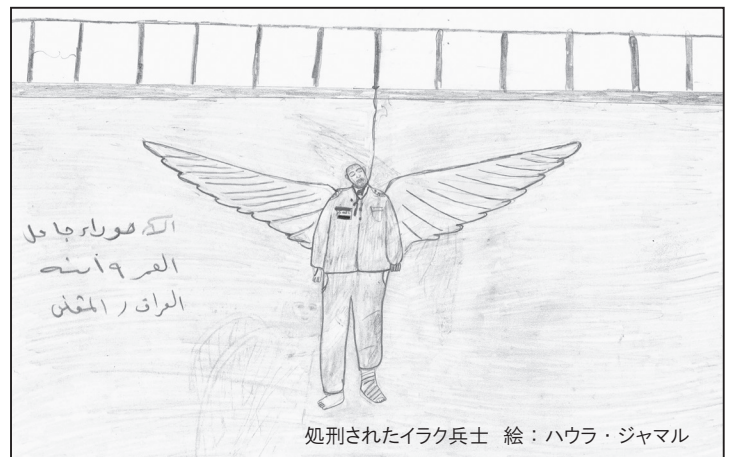
彼女を連れていきたくったのは、帯広の六花の森。六花亭の花柄包装紙に描かれた草花の絵は、山岳画家の坂本直行の作品で、森には、包装紙に登場する草花がきれいに植えられている。ハウラに日本の花を描いて欲しい。帯広がこの日は何と 35 度を超える猛暑日になってしまった。はまなすと蝦夷アジサイを描いたところで、冷房の効いた屋内に入り絵具で色を付けたりして時間を過ごす。「イラクにない花を描けてうれしかった」というハウラ。花だけではない。暑くてもここにはイラクにない平和があった。

私がイブラヒムの一家を知ったのは、マリアムとの悲しいお別れのわずか数時間前でした。お母さんがどうになってしまうのか何もわからない 4 歳のファートマと病室の隅で頭を抱えてうずくまっているイブラヒム、イラクから治療に来た患者家族やアンマンでムハンマドとハディージャの双子を預かっている家族、支援する人たちが集まって、これからどうするか会議が開かれている、そんな夜でした。ハウラとの出会いは、バスラで院内学級を始めたイブラヒムが見せてくれた闘病中の彼女が描いた赤い花の絵でした。アンマンの患者の生活支援のための手作りカレンダーの第 1 号に使わせてもらいました。10 年ぶり、そして、初めて会ったはずなのに、お互いの間の時間や距離などまったく感じさせないのは、イラク人の魅力です。

北海道ツアー中に訪れた札幌の円山動物園で、ハウラは、トラとのツーショットを撮るために檻の前を右に左に走り回ったり、大口を開けて迫ってくるワニに驚いてひっくり返ったり、大興奮。動物園の裏山のゲレンデに広がる草地を見るやいなや、ファートマと二人、靴を脱ぎずて、はだしで走り回ったり寝転んだりして楽しんでいました。帯広の高校では、「オイシイ」と抹茶を堪能し、ホームステイ先では、イブラヒムがバスラの奥さんに電話で指示を仰ぎながら煮込みスープやサラダ作りに奮闘、女子二人は修学旅行気分夜中 2 時過ぎまでおしゃべりに没頭し、翌日の写生会は寝不足でバテバテ……。

予想外に暑い北海道でしたが、ハウラは「医者になりたい」、ファートマは「父のように病気の子供を教える先生になりたい」と将来の夢を語り、イラクの子供たちを支える絆がイラク人の中に育っていることを実感し、心強く感じた 4 泊 5 日の旅でした。

西村陽子（アラブの子どもと仲良くする会）



【戦後 70 年】

8月6日、十勝から長崎に向かう。

「イラク人として戦争のない世界を作っていきたい。日本から私が譲り受けたメッセージです。」イブラヒムは、長崎につくと、故大倉記代さんから譲り受けた、佐々木禎子さんが折った本物の千羽鶴の入った瓶を見せてくれた。

昨年亡くなられた童話館の川端強社長は、「長崎だからこそやらなければならない」という強い思いで、バスラの病院の支援を続けてくださった。その遺志は、後を継いだ川端翔社長をはじめ童話館として、引き継がれている。

イラク戦争をきっかけに生まれた JIM-NET だが、そこには、さまざまな人間模様が織り込まれ、それぞれの糸には戦争に反対するという強い芯があった。ただ単にもつれた糸くずで終わるのではなく、日本とイラクが縦糸と横糸のように折り合わさって平和をつくっていくような。こんな時代だからこそ、そんな感じでやっていきたい。

私たちは、「遠くにいる見えない誰かを想いつづけていく」のが案外むずかしいものです。

ですから、こうして、現地でおこっていること、そこに暮らす人たちの生活や想いを、聞かせてもらえるのは貴重な機会でした。

私たちの想い（支援）が、イラクでどう形になっているのか、または、なかったのか…。では、何が足りなかったのかを考えるきっかけにもなりました。

もの静かだけど、しっかりとした意志を持ち、やさしいハウラ。笑顔が印象的で、いつも周りを明るい気持ちにしてくれるファートマ。おかれている状況や言語は私たちとずいぶん違うようですが、彼女たちも当然、私たちの大切な子どもたちと同じように、音楽に興味があって、おしゃれが大好きで、家族に愛されたいと願っている…。そんな当たり前のことを、二日間ともに過ごすことで再確認させてもらったように思います。

平和や支援とは、けっしてむずかしいことではなく、こういった日常のささやかなしあわせが続くようにと願い、そのための努力を怠らないこと。そして、それが、自分にとって身近な人だけでなく、そこから少しひろげたところにいる人たちや、先の時代を生きる人たちのこととしても考えられることなのだと思います。それはもちろん、簡単ではありません。それでも、確かに実る瞬間があります。現地で支援に携わる人たちが続けているこの努力を、私たちもあきらめず、支援と支援のあいだをつないでいけたらと願っています。

「童話館ぶっくらぶ」で絵本をとってくださる方々は、お子さんへの愛を「絵本を読んであげる」という形で表現しています。けれど、その愛が、自分の子どもだけでなく、海をこえて、時間をこえて、遠くにいる見えない子どもたちのしあわせとなって実を結ぶものであるならば、どんなに嬉しいことか。

私たちはこれからも、ジムネットの支援を続け、絶望のふちにある子どもたちの希望をつないでいけるよう、企業としても努力をしていきたいと思います。

童話館編集企画室室長 川口

ハウラさん、イブラヒムさん、ファートマさんの来日ツアーが無事に終了しました！

ご支援くださった皆様、本当にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

日本滞在中の日程

7/31（金）	来日
8/1（土）	東京 劇団俳優座の朗読会を鑑賞 NGO 非戦ネット集会でスピーチ（イブラヒム）
8/2（日）	札幌 ピースオンイラク～イラクの声を聞こう～
※8/1（土）～3（月）	同時開催「ハウラとイラクの子どもたち絵画展」
8/4（火）	帯広 帯広柏葉高校交流会
8/5（水）	帯広 六花の森（六花亭）で写真
8/7（金）	長崎 講演会 童話館「祈りの丘絵本美術館」 ※童話館が招聘している福島からの「高校生平和大使」にも会うことができました。
8/8（土）	長崎 原爆資料館見学 佐賀県医療センターの院内学級見学（イブラヒム）
8/9（日）	東京 トークと交流会 8.9 @バルシステム本部 ※イブラヒムがイラクで集めた募金を寄付した「アースウォーカーズ・福島・ドイツ高校生交流プロジェクト」の高校生達も駆けつけてくれました。
8/10（月）	東京 駐日イラク大使館を訪問（イブラヒム）
8/11（火）	東京 新宿クリエイターズフェスタ 2015 子どもアート「中東アラブフェスティバル」
8/12（水）	帰国 JIM-NET スタッフとフェアウェルパーティー



上：8月5日、六花の森にて、ファートマさん（左）と西村陽子さん（右）。
下：フェアウェルパーティーで鎌田實 JIM-NET 代表理事と。



◆鮮やかな赤い花が、スクリーンいっぱいに広がった！咲いた、咲いた！ハウラちゃんの描いた「いのちの花」が会場に大きく映し出されたとき、私はとても嬉しかった。初めて絵本を手にしたとき、ひとりでも多くのひとに、この絵本をお届けしたいと思いました。

2015年8月1日（土）六本木の俳優座5階にて「戦争とは…2015」が開催。私はこの平和を願う朗読公演で、初来日のハウラちゃん、佐藤真紀さんや皆様のご覧頂く中で『ハウラの赤い花』をアコーディオンの演奏を添えて曲もつくり、うたひ語りで上演、記憶に残って欲しい一心で歌わせて頂きました。強い放射線で白血病になり、手足を無くし、命を落とす子供たち。多くの罪のない人たちの命や尊厳が踏みにじられています。



戦場下にあっても、子供は希望を願うのですね！この花を守るのは大人の役目、それは未来を育み守ること。ハウラの花が多くの人々の心に咲くことを強く願っています。

（写真：朗読する長浜さん / 俳優座提供）

長浜奈津子（俳優座）

◆JIM-NETさんとパルシステム東京とは、組合員による「平和カンパ」やチョコ募金のお手伝いなど、さまざまなご縁があります。そんな中で、今回の企画に関わることができたことを、心から嬉しく思います。

この日（8月9日）はトーク含め三部構成。

第一部の「赤ベコの絵付け」は、JIM-NETさんが東日本大震災後、福島県会津地方の「赤ベコ」を中東の子ども達に届けていることから、小学生対象に参加者を募集しました。結果は老若男女が悪戦苦闘の末、愛らしいベコ達が誕生。

第二部はイブラヒムさん、佐藤真紀さん、ハウラさん、ファートマさんによるトーク。ハウラさんとファートマさんは少々バテ気味ということで、参加時間は短かったのですが、その分、佐藤さんとイブラヒムさんが、スライドを交えて2人の15年以上の歴史を語ってくれました。佐藤さんと出会った時、イブラヒムさんの奥さんはがん治療中で、その後亡くなったとか。イラクでは誰もが戦争がもたらした苦しみや悲しみとは無関係でいられない現実。また、院内学級で、絵を描くことは自分の使命であると感じ、絵に向き合い続けたという子どもたちの逸話。淡々と語られる重い現実が切なかったです。

佐藤さんと、そして日本とつながったイブラヒムさんは、東日本大震災では日本のために募金を集めてくれました。ハウラさんは日本を励ましたいと絵筆をとりました。この等身大でフラットな関係の心地よさと、日本の行く末に関する責任を感じました。



というイブラヒムさんの反応が少々心配でしたが、結果はOK。「おいしいね」という笑顔は世界共通ですね。

このように、手と耳と目、口と胃袋で、イラクを、そして世界を感じたディープな一日、参加者はのべ150名以上にのぼりました。

（写真：パルシステム&JIM-NETスタッフと / パルシステム東京提供）

松野玲子（生活協同組合パルシステム東京常任理事）

◆今回は縁あって、招聘ツアーに関わらせていただきました。

「相手の顔が見える支援」支援している相手に会うのは、理想だけど、イラクが大変な時によろず日本まで、三人は来てくれたと思う。準備は女性陣中心の中、なんとか進んでいき、当日を迎えた。大成功まではいかなかったが、成功な客入りだったのでは？と、思う。

イブラヒムさんの講演に、おっさんの僕も泣いてしまった。

3人は、日本楽しめたのか？どんな国と思って帰ったのか？いつか再会できるのか？という想いはあるが、まずは私たちに抱えた課題（いつも同じメンバーで、取組みしている）を克服しつつ、JIM-NETの支援を御手伝いしていきたい。（写真：8月2日講演会にて）

千葉 喬（イラクからハウラを招く会・札幌）

◆8月4日からは帯広で

す。ホームステイ先の中村典代さん、娘の佳世さんと落ち合って、まず、柏葉高校へ。国際交流クラブの生徒さんたちは、はやりのゆるキャラや帯広スイーツを英語でプレゼンし、書道部に書いてもらった団扇のお土産など、手が込んでいました。次の茶道部でも、英語での挨拶後、お茶を



点てていただきました。ハウラは素直においしい！でも、ファートマは、日本語で絞り出すようにおいしいと言い、みんな笑ってしまいました。袱紗のたたみ方も教わりました。休み中に準備してくれた生徒さんたちに感謝です（写真：柏葉高校で初めての日本茶体験）。ハウラたちは、校舎がきれいだと感心していました。佳世さんの母校ということで声をかけてくれたのですね。翌5日は、猛暑の中、帯広近郊の中札内村の「六花の森」で、ハマナスやエゾアジサイを写生して、庭内の美術館で涼みながら色をつけました。ハウラは、「イラクにはない花を描けるのがうれしい」と言っていました。

夕飯は2晩ともイブラヒムが、トマトスープ（黒い干しライムでコクを出す）や、パスタの入ったライスをつくってくれました。冷凍ハラルミートを東京から送ってもらい、なんと、イラクのおつれあいに電話で教わりながらの調理でした。娘たちは、手際よく野菜を刻んでサラダづくりです。

さて、シャワーのあとはパジャマでリラックス。ハウラの髪は、白血病の治療でぜんぶ抜けてしまったあと、一度も切らずに伸ばして腰までたっぶりありました。翌朝には、すてきな髪飾りもヒジャブで覆ってしまいます。



エゾアジサイ 絵：ハウラ・ジャマル

中村さん一家には、カルチャーショックだったと思います。お父さんお手製の唐揚げが、ハラルミートでなくて、食べてもらえなかったり、娘たちがシャワーを浴びて部屋に戻るまでは、男の人には、家の外に出てもらったり・・・。

福島からの保養の子たちが帰ってすぐなのに、ハウラたちをあたたかく受け入れてくれた中村さん一家に心から感謝します。

七尾寿子（イラクチョコ募金の会）

シリアの将来のために一助け合う社会へ

福田直美（JIM-NET ヨルダン事務所長）

内戦によるシリア人負傷者は 100 万人を超えるといわれる中、国境を越えてヨルダンに緊急治療を受けに来るシリア難民は絶えません。負傷し障害者となった人も多くいます。JIM-NET は、紛争で傷ついたシリア難民が適切な治療を受けられるための取り組みとともに、難民がヨルダンにおいてともに助け合っていく社会をつくっていきけるよう、2 つの研修を行っています。

◆日常生活を楽にするリハビリテーションを

シリア人負傷者／障害者のリハビリテーションに従事するヨルダン人およびシリア人の理学療法士や看護師を対象に、能力向上のための研修を実施しています。ヨルダンにおけるリハビリテーションは、筋トレのように体を動かして身体の機能を保つ事に偏りがちですが、この研修では、「歩く」「食べる」など日常の動作に即した指導をリハビリ従事者が負傷者／障害者やその家族に対して行えるようになることを目的としています。受講生の一人、理学療法士のハディールさんは、「歩行障害がある人に対しては、一人で安全に歩くために、たとえば床の段差をなくすなど生活環境の改善指導もするようになりました」と言います。

またこの研修は、理学療法士が現場での課題や悩みを共有する機会にもなっています。ある施設の理学療法士から「脊髄損傷で手に力が入らない人がいるのだが、介助者の力を借りずに自分で食事をとるために、どのような指導をできるだろうか」という質問があった際には、同様のケースの障害者を指導した経験がある他の施設の理学療法士がその施設に赴き助言を行うなど、お互いの経験を活かした学び合いが見られるようになりました。



スプーンを握ることができない人が食事をするための自助具の使い方を指導する理学療法士

◆負傷者／障害者の社会参加の機会を増やす

ヨルダンを含む中東地域は、日本ではよく見られるバリアフリーの設備が少なく、また社会の障害に対する理解も十分ではありません。そこで JIM-NET はシリア難民が多く居住する北部イルビッドで、「地域に根ざしたリハビリテーション」研修を行っています。地域で活動する NGO や障害者とその家族が、ともに、障害者がより生きやすい社会について考えていく研修です。

研修にはイルビッドで活動する NGO のスタッフ、ナワールさんが参加しています。ナワールさんは、「私たちは普段、女性を対象としたエンパワメントの研修を実施しています。障害者も社会の一員であることを学んだので、今後は研修に女性障害者を積極的に含んでいきたいと思います」と話しました。

また、リハビリ施設スタッフで、障害者向けの活動を調整しているシリア人のイマーンさんは、「負傷者／障害者の中には、社会や家族の障害への理解不足もあって外に出る機会があまりない人も多くいます。まずは彼らが外に出て社会活動に参加するきっかけとなるよう、障害者が中心の活動をつくっていききたいです」と言います。これらの取り組みが負傷者／障害者の社会参加の機会を増やし、彼らの生きやすい社会へとつながるよう、今後は具体的な活動を一緒に考えていきます。



研修には障害者も参加。どのような社会を目指していくのかを一緒に考えます。

◆「シリア人の社会を助きたい」

イマーンさんに、どうしてこの仕事をしているのか、と聞くと、「シリア人を、そしてシリア人の社会を助きたいのです」という答えが返ってきました。「生活が厳しい人を近所の人や親戚が助ける、シリアにはもともとそんな助け合いの文化が社会に根付いていました。今、難民となりそれまでの『社会』が崩れてしまったことで、困っている人たちがたくさんいるのです」。

難民となりバラバラになったシリア人社会が、ヨルダン社会の協力を得ながら相互扶助の力を取り戻していこうとする努力を、JIM-NET は応援していきます。難民として生きる今も、そしていつかシリアに戻った後の社会をつくるにあたって、彼ら自身の大きな支えとなることを願って。

JIM-NET のヨルダンにおけるその他の取り組み

- ・ 難民負傷者／障害者の医療施設へのアクセス支援
- ・ 義足や義手の提供
- ・ 難民キャンプにおけるリハビリテーションおよび都市部での在宅リハ
- ・ 地雷や不発弾による被害回避のためのワークショップ

JIM-NET は NGO 非戦ネットの仲間たちと安保法案の廃案を求めています

内海旬子 (JIM-NET アドボカシー担当)

2015年7月2日、JIM-NETの佐藤事務局長を含む17人の呼びかけ人と賛同者が集い「NGO 非戦ネット」が設立されました。これは、国会で審議中の安全保障関連法案に反対する有志のネットワークで、8月末現在、58団体と約500人が賛同しています。7月14日に「安保法案に反対する声明」を発表、8月30日の「戦争法案廃案！安倍政権退陣！8・30国会10万人・全国100万人大行動」にはプラカードを手に多くの仲間が参加し、ステージでのアピールもいたしました。

NGOは、国内外の社会問題を解決し、人々が安心して安全に、そして自分たちの思うように暮らしていける社会を作ろうと様々な活動をしています。その中で、紛争や貧困、不平等や不正が問題の原因にあることを目の当たりにしてきました。

JIM-NETも、イラク戦争反対と被害者支援が始まりです。そして今も支援を終えることができず、さらにヨルダンでのシリア人難民支援も始めています。イラクもシリアも深刻な状況にあり人々は苦しんでいます。

そのような問題の解決に「空爆」を選ぶ国が少なからずあります。実際に、国連軍や有志国による空爆で「敵」を倒してくれ、と話すイラク人やシリア人もいます。しかし、「空爆」が問題を解決しないことを私たちはよく知っています。上空から放たれた爆弾が狙った軍事施設から外れて民家に落ちたという例や軍人と間違われた民間人が狙われ殺されたというのもよく聞く話で、犠牲者には多くの子どもたちが含まれます。何より、人々が常に「空爆」や「死」に怯えながら暮らさなければならない状況では、どんな努力も「安心で安全な暮らし」を作り出すことになりません。

そんな中で私たちが選ぶのは、やはり「対話」による解決です。武力行使では根本的な解決が望めないのは明らかなのですから、時間がかかって効果が薄いように見えるかもしれないけれど、やはり対話を続ける努力をするしかないのです。

日本が集団的自衛権の行使や戦争の「後方支援」の名の下に、中東・アジア・アフリカなどあらゆる地域の戦争で同盟国に協力すれば、日本は「戦争加担者」になります。そうなれば、NGOが「テロ」の標的となる危険性は高まり、紛争に苦しむ地域の人達たちと日本のNGOが信頼関係を構築して活動を行っていくことも困難になるでしょう。

憲法9条をもつ日本がすべき国際貢献は、軍事介入によって犠牲者を増やすのに加担するのではなく、誰も殺さず誰も殺さない方法で国際社会での役割を果たすことです。

NGO 非戦ネットは、安保法案の廃案を強く求めています。

(2015.9.1 記)



NGO 非戦ネットの賛同人にはどなたでもなることができます。

下記メールアドレスにご連絡ください。

送り先：アユス仏教国際協力ネットワーク tokyo@ngo-ayus.jp

「NGO 非戦ネット賛同」と件名にご明記の上、氏名、メールアドレス、以下から該当するもの（NGO職員・役員、NGO会員、一般）を選び、NGOの方は団体名をお知らせください（団体名の非公開をご希望の場合はそのように書いてください）。メッセージも歓迎します。

シリーズ「戦後70年企画」

崔 麻里 (JIM-NET イベント担当)

昨年の集団的自衛権閣議決定に続き、安保法案が猛スピードで審議される中、JIM-NETも海外で活動をするNGOとしての発信を強く意識する夏となりました。

7月にはイラクで活動している榎本彰子と国井真波看護師が「女性自身」に7ページの特集で取り上げられ、大きな反響を呼びました。その直後にイラクから「赤い花」の絵で親しまれているハウラさんとイブラヒム、ファートマちゃんを迎え、日本ツアーを無事に終えることができました。

「戦後70年企画」もスタート、8月17日(月)に「太平洋戦争、イラク戦争、そしてこれからの戦争」(綿井健陽氏×村田信一氏)、8月26日(水)に「イラクー深刻化する『イスラム国』による女性への暴力」(伊藤和子氏×七尾寿子氏×榎本彰子)を連続開催し、JIM-NETのイベントに初めて参加される方々も多く見ら

れました。

さて、11月6日(金)には、池袋・豊島公会堂でクミコさん(歌手)、佐々木祐慈さん(ミュージシャン・「サダコ」虹基金)、斉藤とも子さん(俳優)をお迎えし、鎌田代表とともにチャリティートーク&ライブ「INORI(祈り)」を開催いたします。

「戦後70年企画の集大成&第11回チョコ募金キックオフ」として企画しました。

詳細は追ってお知らせいたしますので、どうぞ楽しみに！

写真：8月26日、集会の最後にみんなで非戦の誓い。



鎌田代表のつぶやき～「それでも僕は帰る」

「それでも僕は帰る～シリア 若者たちが求め続けたふるさと～」という映画を見た。

シリアの有名なサッカー選手、ユース代表でゴールキーパーの19歳の青年バセット。非暴力を貫き、カメラで記録し続けた24歳の青年オサマ。2人のドキュメンタリー映画である（監督：タラール・デルキ／2013年）。

戦争の現場がこれほど残酷で、破壊的なのが、恐ろしいほどよくわかる。2011年に始まった「アラブの春」と呼ばれる民主化運動。アサド政権の暴力的な存在、それに立ち向かうとする若者たち。アサド政府軍の完膚なきまでに若者を叩き潰そうとする残虐な戦い方。若者が、どんなことがあっても故郷に帰りたいという若者の気持ちが、痛いほどわかる。

この戦いに傷ついて、JIM-NETが支援をし続けているヨルダンやイラクに、難民となってやってくる人たちもいる。アサド政権と、それに対抗する戦いの中で、「イスラム国（IS）」というテロ集団が力を持ち、このISに迫害されてシリアを脱出する人たちもいる。

自由や民主主義が広がっていない地域で、若者たちが自由に音楽を聞きたい、自由に読みたい本を読みたい。この民主化運動はとても大切であるが、でも歴史から学ばないといけない。

民主化運動を「春」と言い出したのは、おそらく1968年、「プラハの春」が始まりだろう。共産主義の国で、100万人の若者が立ちあがった。ビートルズが聞きたかったのである。発禁本になっていたソルジェニーツィンの共産主義批判をした小説『収容所群島』を、若者たちは読みたかったのだ。当時は「米・ソ」の冷戦が真っ只中の頃である。ソ連を支えるチェコが自由主義の国になれば、冷戦を終えることができる。注目して見ていたら、ソ連から大量の戦車軍団がやってきて、若者たちは蹴散らされた。

「春」はこなかったのである。

今回の「アラブの春」でも、民主化運動と共に、逆にエジプトのように軍事政権に乗っ取られたりしてしまうこともある。シリアのように、国が取り返しのつかないくらい破壊されてしまうこともある。一人ひとりの国民が自由に、人権を尊重されて生きられるような体制にするために、これからもいくつもの「春」という民主化運動を起こしていく必要がある。世界の知識人やNPOが、もっと民主的で自由や人権が守られるようにするために、賢明にならないといけない。

「それでも僕は帰る」を、傷ついていくシリアの若者たちを見ながら、二度とシリアのようにならないために、次の民主化運動が起きた時、どういう協力をしてあげることが大事なのか、考えさせられた。

JIM-NETはイラクや、そのまわりのアラブの子どもたちの命や健康や生きる権利が守られるように、これからもできるかぎりの応援をしていきたいと思います。



「それでも僕は帰る～シリア 若者たちが求め続けたふるさと～」
上映日程は公式サイトをご参照ください。
<http://unitedpeople.jp/archives/1095>

「ハウラの赤い花」グッズのご紹介

今回来日したハウラ・ジャマルさんの絵が、おしゃれなグッズになりました！モチーフは絵本『ハウラの赤い花』。コットンバッグとクリアファイルは新作です。タオルハンカチは今治タオルとのコラボで作成した人気グッズ。TシャツはJIM-NETにいつも多大なご協力をいただいている「奈良チーム」の皆さんがデザインして下さいました。募金は原価を除いて、イラクの小児がんの子どもたち支援に充てられます。※募金グッズなので、消費税はかかりません。※発送の場合は、別途送料がかかります。



Tシャツ サイズ:WS (胸囲 80・着丈 58cm)、160 (胸囲 92・着丈 63cm)、M (胸囲 104・着丈 69cm)、L (胸囲 110・着丈 72cm) 色: 黒/白 ¥2,500



黒も同じデザインです。

クリアファイル (A4)
サイズ:
横 220 × 縦 310 mm
色: 半透明 ¥300



コットンバッグ (A4)
サイズ (本体): 横 260 × 縦 330 mm
色: 生成り ¥700

タオルハンカチ
サイズ: 横 245 × 縦 245 mm
色: 生成り ¥750

イラクで小児がんを苦しむ子どもたちの治療費のために、募金にご協力をお願いします！

郵便振込口座 00540-2-94945 日本イラク医療ネット（振込用紙に「イラク小児がん支援」とご記入ください）

JIM-NET 便り 2015 年 9 月号 発行日: 2015 年 9 月 28 日 発行: 特定非営利活動法人 日本イラク医療支援ネットワーク
〒 171-0033 東京都豊島区高田 3-10-24 第二大島ビル 303 E メール info-jim@jim-net.net TEL/FAX 03-6228-0746
URL <http://jim-net.org> Facebook <https://www.facebook.com/JapanIraqMedicalNetwork> Twitter https://twitter.com/jim_net